

◆ 今週のコメント

- ・ 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例あります。本年の累積報告数は79例で、平成11年～平成19年の同時期の累積報告数(24例～53例)と比べ、最も多くなっており、年齢階級別では、20代及び30代の各12例(15.2%)が最も多くなっています。
- ・ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は0.49で、過去5年平均値(0.34)を上回っています。年齢階級別では、5歳及び7歳の各4例(20.0%)が最も多くなっています。
- ・ 百日咳の報告が1例(20歳以上)あります。本年の累積報告数は既に49例で、平成12年～平成19年の年間累積報告数(17例～39例)と比べても、本年は最も多くなっています。また、年齢階級別割合では、20歳以上の割合が、本年は28.6%(14例)と最も多く、平成12年～平成19年に比べかなり高くなっています。

◆ 今週のトピックス:〈RSウイルス感染症〉

- ・ RSウイルス感染症の報告が、11例(定点当たり報告数 0.27)で、例年よりも約1ヶ月以上早く流行の兆しを見せています。年齢階級別では、6ヶ月～11ヶ月の6例(54.5%)が最も多く、次いで1歳 3例(27.3%)となっています。
詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・ 二類:結核 10例(喀痰塗抹陽性 3例, 無症状病原体保有者 なし)
【1月以降の累積報告数 314例(喀痰塗抹陽性 99例, 無症状病原体保有者 31例)】
- ・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症(O157 VT2) 1例 【1月以降の累積報告数 79例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.00	0
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.54	104
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.49	20
	③ 突発性発しん	0.32	13
	④ RSウイルス感染症	0.27	11
	④ 水痘	0.27	11
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

病原体情報

ありません。

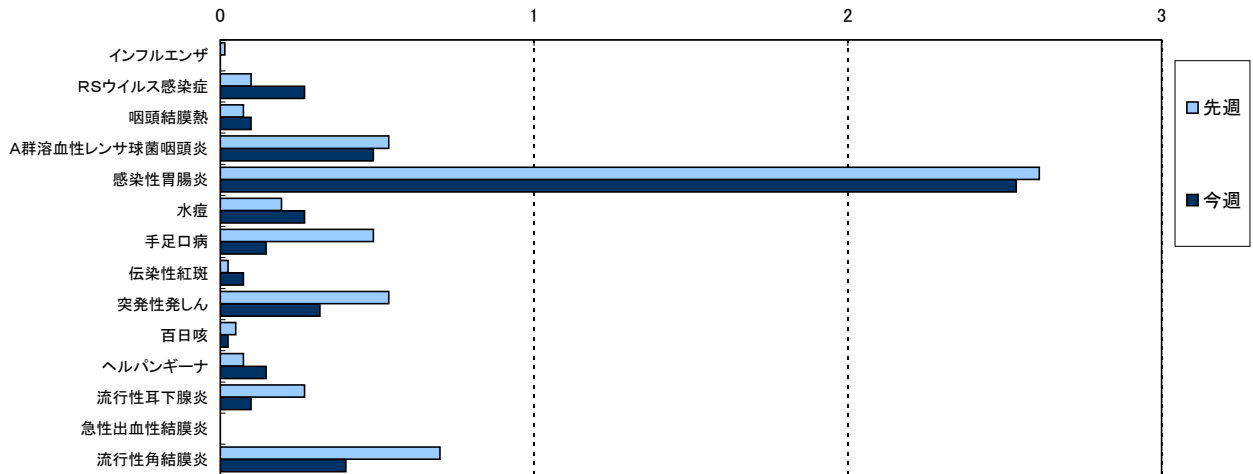
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:〈RSウイルス感染症〉

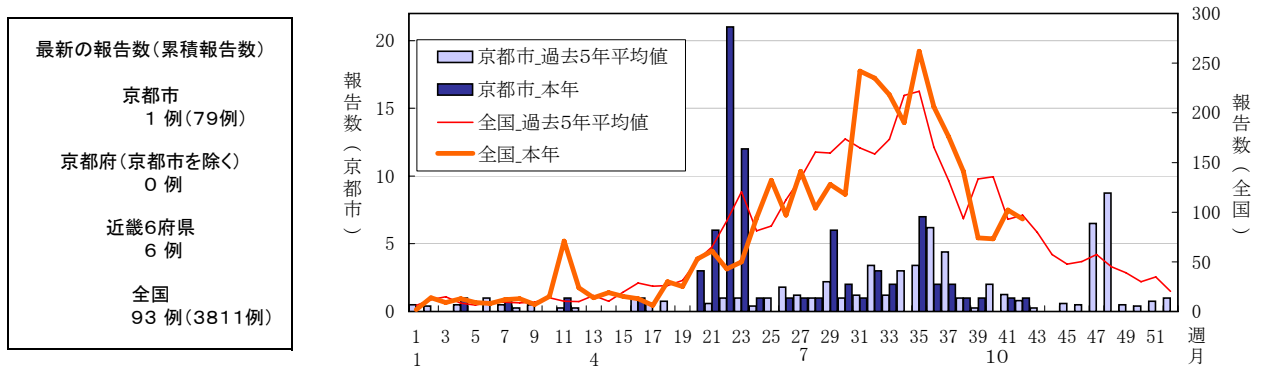
(注) 京都市のデータは、平成20年10月24日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。
病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第42週)と先週(第41週)の定点当たり報告数の比較

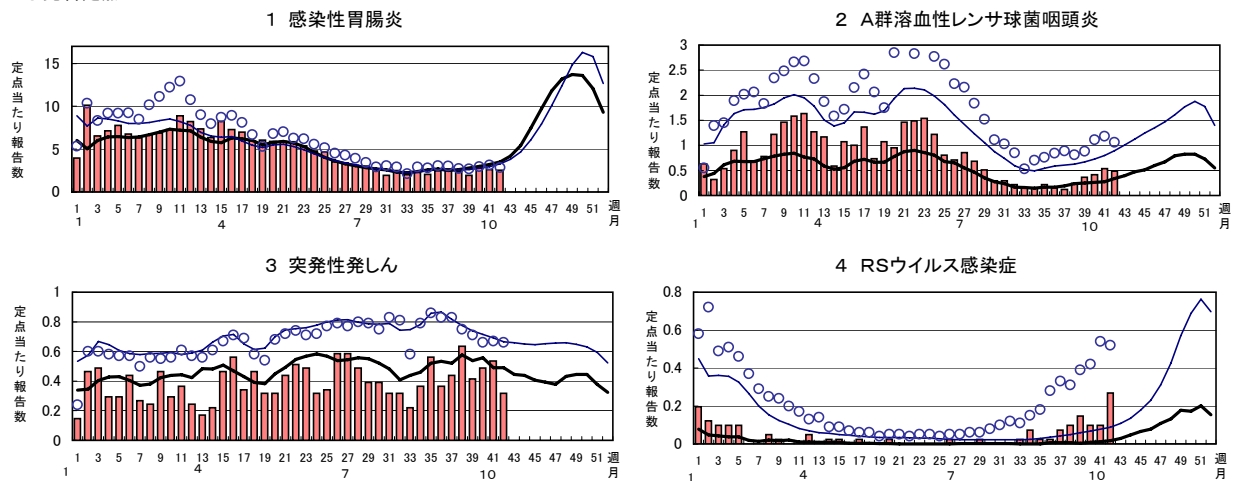


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

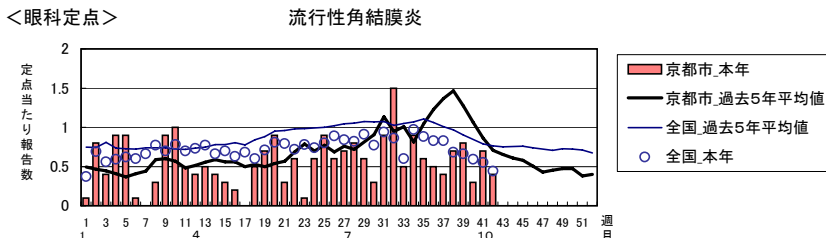


3 主な感染症(小児科)の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



今週(第42週)のトピックス: <RSウイルス感染症>

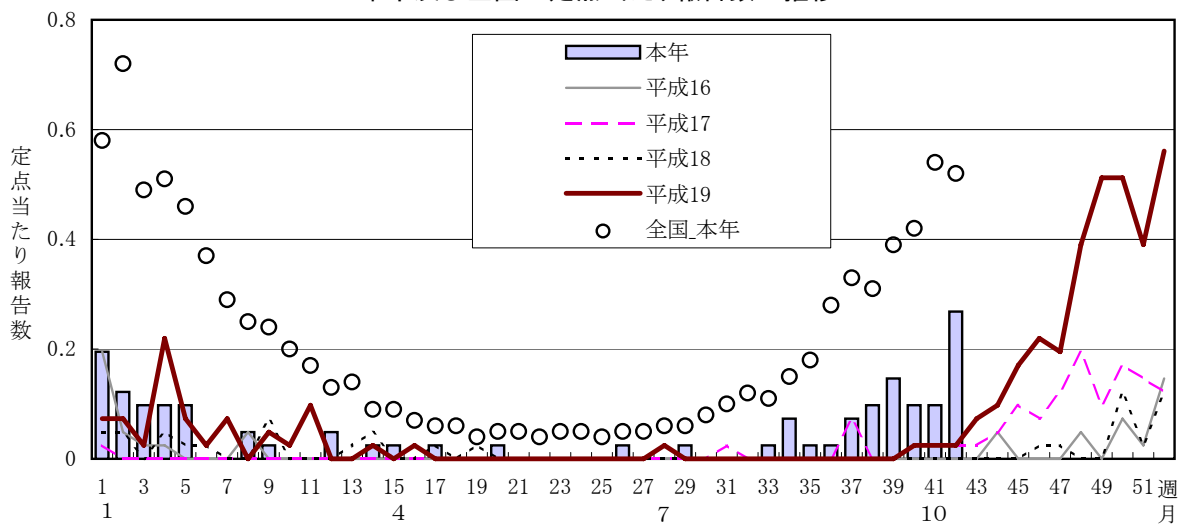
RSウイルス感染症の報告が、11例(定点当たり報告数 0.27)で、例年よりも約1ヶ月以上早く流行の兆しを見せています。年齢階級別では、6ヶ月～11ヶ月 6例(54.5%)が最も多く、次いで1歳 3例(27.3%)となっています。

定点当たり報告数の推移をみると、第33週以降連続して報告があり、過去と比べて、流行の立ち上がり方が早くなっています。また、平成16年～平成19年の第33週～第42週の累積報告数(0～6例)と比べても、本年は38例と最も多くなっています。

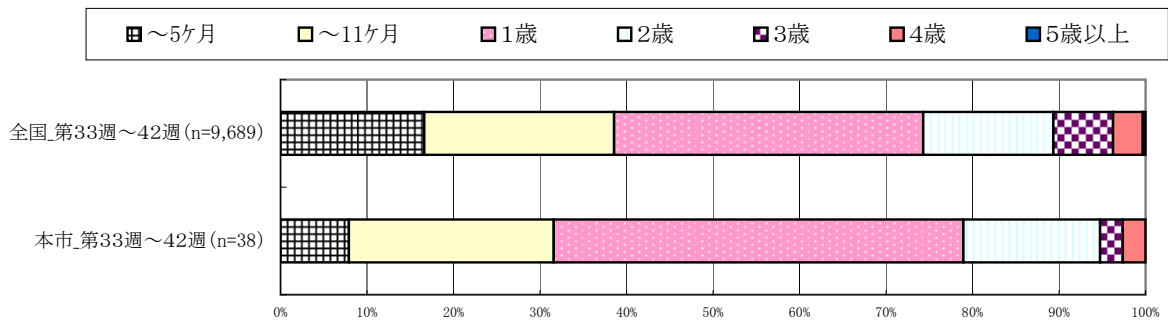
第33週～第42週の累積報告数を年齢階級別にみると、本市及び全国ともに、1歳の割合(47.4%、35.3%)が最も多くなっています。また、2歳以下の割合は、本市では94.7%、全国では88.2%を占めています。行政区別にみると、伏見区が38例中23例と最も多く、60.5%を占めています。

都道府県別では、宮崎県、福岡県など九州地区が多くなっており、近畿6府県では、大阪府が最も多くなっています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



年齢階級別累積報告数(本市及び全国の第33週～第42週)



都道府県別定点当たり報告数(第42週)

